《學界消息》

# ワルター・ロールベック教授の訃

大林良一

ケルン大學名譽教授、日本保險學會名譽會員ワルター・ロールベック（Walter Rohrbeck）博士は本年四月六日逝去された。昨年八月滿七十歳を祝われて間もない博士の急逝により、ドイツ國内は勿論、全ヨーロッパ否世界の保險學界はこの一大指導者を失ったことを深く哀惜するものである。第二次大戰前直接指導を受け、一昨年再會の喜びを得た筆者は、ここに恩師の經歷と業績を顧みて追悼の意を述べようと思う。

○

教授は一八八五年八月二十日、東プロシャのケーニヒスベルヒに生まれたが、幼少の頃からベルリンに移り、ベルリン大學において經濟及び法律學を專攻した。博士の父が農業保險會社の支配人であったため、在學中農政學者 Dade 氏の助手となり、一九〇六年雹害保險に關して最初の學問的勞作を發表した。一九〇八年「獨逸保險契約法及び日施行規則による雹害保險契約」によりドクトル・ユリス（ハイデルベルヒ大學）を、翌年「獨逸における雹害保險の組織」により、ドクトル・フィロゾフィエ（ベルリン大學）を得た。

大學卒業後、雹害保險事業に從事、第一次大戰後ドイツ私保險協會の理事となり、保險事業の利益を代表して、勞資の間に團體協約の締結に成功した。Kommentar zum Reichstarifvertrag für Angestellten der Privaten Versicherungsunternehmungen vom 5. Februar 1920 は當時の產物であった。一九二〇年フランコナ再保險會社取締役に就任、一九二五年には火災保險會社の役員となり、ナチス革命後一九三三年 Handelsgerichtsrat に任ぜられ且つ新設の簡易生命保險組合（Vaterländische Volkslebensversicherungsverein a. G.）の理事長に任ぜられ、その創業時代を擔當した。

○

このように教授は前半世の間、多方面の實務に携ったが、學問の世界に背を向けていたものではない。Habilitationschrift こそ書かなかったが、一九三三年卽ち博士が大學の講義を擔當する以前に單行本五、辭典執筆論文一〇、雜誌論文八三、新聞寄稿三、書評その他七を數えている。これ等の勞作の中には指導的見解を示したものが少くないが、とりわけ Versicherungswesen und Soziologie（Ehrenzweigische Assekuranz Jahrbuch, Bd. 31, 1910）は保險の社會的考察に獨創的見解を示したもので、この點で Tönnies, Leopold von Wiese 等の社會學者を指導したものであり、從來の無味乾燥になり勝ちな保險の法律的並にアクチュアリ的考

察に、新たに血の通った人間味のある考察を加えることになったものとして特記されねばならぬ。又 Versicherungstechnik oder Versicherungswissenschaft (Wirtschaft und Recht der Versicherung, Beiheft zur Zeitschrift für Versicherungswesen und Feuerschutz, Nr. 3, 1912) は Manes, Dorn 等が固守する「ドイツ式保險學概念」に對して眞先に反對を表明した論文として、ドイツ保險學史のみならず、廣く世界の保險學史に殘るものである。大學の教壇に立っていないロールベックの學問的勞作に注意を拂った Manes が、その編集の保險事典の中に多數の論說を博士に執筆させている。こうした學問的業績が認められて、Manes が人種的理由で追放された後、ベルリン經濟大學の講義を依囑されること (Lehrbeauftragte) となったが、それは一九三四年十一月のことであった。

ベルリン經濟大學におけるロールベック博士の擔任は兼務とは云え、私保險、社會保險の兩講義の外に、豫習と演習とを加えて、正に專任教授にも等しい重任であって、このときから博士の活動の重點は學問に移っていたといえよう。そのためか一九三八年末には同大學から早くも Honorärprofessor の稱號が與えられた。その直後、ケルン大學保險學擔當者 Helpenstein 教授の死亡により、同大學保險學專任教授として赴任することとなり、前述の保險組合理事長を辭して、完全な學徒となった。ドイツにおいては神學中心の大學制度のために一般には保險學の講座は存在せず、ケルン大學にのみ認められていた——現在も然うである——ので、その教授に就任した博士の學問的責任は極めて重大なものとなった。

○

一九三九年の夏學期からケルンで開講したロールベック教授は、同地及び近接都市の保險關係團體の支援を得て、翌年の秋ケルン大學保險研究所を開設した。この研究所はドイツに既に存在していたベルリン及びライプチッヒの保險研究所と鼎立する形となった。當時第二次大戰は既に始まっていたが、博士は一九四一—二年に亙って同研究所の叢書四冊を刊行していた。

戰後のドイツが東西にわかれ、ベルリンの東部及びライプチッヒが東獨に入り、それぞれの保險研究所が消滅したために、ケルン大學の保險研究所の意義が愈〻加わり、その責任者であるロールベック教授の活動はまことに目覺ましいものがあった。先ず戰時中から中絕していた同研究所の叢書を一九四九年に復活して、新叢書を十四冊編集公刊すると共に、ドイツ保險學者の特殊研究を同叢書の別卷として發行した。この叢書は、一方において、學界で重要な發表機關としての役割を果すと共に、他方では "Fünfzig Jahre Materielle Versicherungsaufsicht, 3 Bde. 1952—5, 1347 S." の如く、保險監督の理論、歷史政策に關する諸問題を隨一の專門家が取扱った、三〇篇の論策を集めた、保險學界業界の雙方にとっての戰後最大の收穫というべきものもあり、寔にロールベック博士によって初めて可能な編集であるといえよう。又その別冊の中にも Kisch: Das Recht des Gegenseitigkeitsvereins や Mahr: Die Einfü-

hrung in die Versicherungswirtschaft の如く、將來永く定本として殘るべきのが含まれている。こうした刊行物の編集者としての博士を通じてケルン大學は保險學及び保險研究の世界的中心となり、博士自身世界の保險學界の指導者となった。

更にドイツの大學において保險學を講ずる者の共同研究の場を持つために、博士の首唱により一九五〇年三月初めて研究會が開かれ、これを出發點として、常設の Arbeitsgemeinschaft der Versicherungswissenschaftler an der deutschen Hochschulen が結合され、博士自身その最初の責任者となった。この團體は昨年から季刊雜誌 Versicherungswissenschaftliches Archiv を發行している。

博士は又保險研究所乃至大學を離れて、個人の資格で二つの記念論文集を發行している。"Beiträge zur Privatversicherung, Festschrift für Emil Bebler, 1953, 388 S." "Beiträge zur Sozialversicherung, Festschrift für Johannes Krohn, 1954, 331 S." 此の如く、戰後のドイツにおける保險學的活動の原動力は總てロールベック博士にあった、というても過言ではないであろう。

社會保險の先進國としてのドイツの保險學界の元老として、ロールベック教授は戰後ヨーロッパ諸外國から屢〻招請を受けた。一九五二年イギリス、一九五三年イタリヤ、一九五四年スペイン及びフランスに旅行して講演をすると共に各國の社會保險制度について研究している。こうした點からして博士は國際的にも重要な役割を占めるに至った。

○

上述の如く實務の傍らにも多くの論著を發表した博士は、教壇專任となってからは一層多くの著作がある。その中主著というべきものは、凡そ次の如きであろう。

(1) Versicherungswirtschaft und Versicherungslehre, ein deutsches Versicherungslesebuch, 1937.
(2) Deutsche Versicherungskunde, 2 Bde. 1938—9.
(3) Wesen, Gehalt und Reform der deutschen Privatversicherung, 1950.

(1)は博士が從來から包懷する保險の社會的考察を「ナチス」の波に乘って自由に發展させたものであり、(2)は教科書的な小さな作品であるが、博士の保險學體系を一應示している。(3)は戰時中から企てた大作が戰災によって資料を失ったため、形を變えて著われたものである。實業界から出た學者として、公・私營保險の兩立を念願とした論稿が少くないが、特に本書は戰後の西ドイツの私保險のレーゾン・デートルを基礎づけようとした勞作である。その他の著作目錄を通覽するとき、一般に教壇生えぬきの學者のような大著のないことに氣付くのであるが、着想の豐富な點並に現實の問題の處理において光っているのは見逃せない。又集合科學としての保險學を非難せる博士に、自ら保險學を定義する場合、常に一定したものではなかった。又保險の概念規定についても時によって異なるものがある

ようである。これ等の點からも、又博士に大著を求める點からも、引退後の博士の目標であった Manes, A.: Versicherungswesen, 3 Bde. 1930—2. の改訂の完成が渇望された次第である。

要するに博士の主要な學問的業績は思考着想の指導性にあって、その點で生えぬきの學者からも尊敬されたものである。他方多年の保險事業の指導的地位にあって專門的研究をつんだので政策面の論說能力が官界實際界からも歡迎され、ケルン大學の保險研究所の維持發展を可能ならしめたものといえよう。こうした業績が認められて、ケルン大學在職十五年にも足らず、ベルリン經濟大學講師時代を加えても二十年に足らないにも拘わらず、六八歳の停年に際しては Emeritus の榮譽を贈られたのである。こうしてベルリン經濟大學のマーネスの講義を受繼いで學問の人となった博士は、ドイツ保險學界においても、曾てのマーネスと同樣に名實共に指導的地位に在り、然もその最も洗練されたドイツ紳士としての性格のために各方面から、マーネス以上に尊敬されたものである。

○

日本の學界が博士の勞作に注意を拂ったのは田中耕太郎博士の「保險の社會性と團體性」(法學協會雜誌第五〇卷、第七、一〇號)に初まるようであるが、ベルリンの博士を訪ねて直接學問的交渉を持ったのは前本學教授、米谷隆三氏が最初であった。次いで一九三五—七年に亘って、神戸大學故白杉三郎教授が師事し、同一九三八—九年にかけて筆者が師事している。博士が教壇に立って後、最初の著作(前掲(1))については筆者も紹介を試みた(一橋論叢卷三號)が、後に白杉教授によって「獨逸保險論」として全譯されたことは周知の通りである。又今次大戰直前の博士の論文 "Versicherungsgemeinschaft oder Versicherte Gruppe?" (Zeitschrift f. di. g. V.W.) が日本の多くの學者により採り擧げられたことは、戰前からの保險學徒の記憶に殘るところである。而して戰後も、教授は上述の如き多數の編著を世界の學界に提供しているが、日本の學界の立直りが不充分なために、これ等ドイツの文獻が未だ充分に消化されてない憾みがある。

右のような個人的指導並に學問的著作を通じての教授の日本學界への功績を認識して、日本保險學會は、一九五三年の大會において、博士をその名譽會員に推擧した。博士自身このことを最大の名譽として、日本保險學會のメンバーの一人として日本保險學の發展に關心を持たれ、先般白杉博士逝去の際にも日本保險學會宛懇篤な弔詞を寄せられた。

○

昨年八月教授が滿七十歳の誕生日を迎えるに際して、ドイツの學會は總力を擧げて記念論文集 Beiträge zur Versicherungswissenshaft. 502 S. Berlin 1955 を編集している。その寄稿論文三十七篇、の中には日本、イギリス、イタリヤ、スイス、スペイン、ブラジルからの十一篇を含み、それ等は保險學の總ての領域に及んでいるもので、博士の學問並に人物を證明

するものである。そしてこの論文集は前掲博士自身の編集した二つの論文集と合せて、いわば「三部作」をなすものである。

尚今年一月は博士が最初の學問的勞作を發表して滿五十年に當るので、この機會に、西ドイツ大統領は、大十字勳章を以て「博士の特別の學問的功績を表彰」している。

一九五三年滿六八歳の定年に達し同年末 Emeritus になった教授は、講義の方も翌年の夏學期を以て辭しており、爾來自宅において休養できる筈であった。又固疾の心臟病のためにも休養が必要であった。然しながら周圍は博士にほとんど休息を與えなかった。適當な後任者のないために、保險研究所の責任者として殘り、且つ保險ゼミナルの指導を續けた上に、學界業界の兩面に亙っての專門家としての博士に對する政府、裁判所、內外の保險業者、學者、學會、保險教育團體からの各種の要望のために博士の頭腦と肉體は酷使されていたのである。後生の指導に生甲斐を感じ他人への援助の中に喜びを求めんとする博士の性格が然らしめたのである。こうした毎日を重ねたために、教授は、エジプトを含めた地中海諸國からの招請によって今年四月夫人同伴享樂する筈であった地中海の旅を前に、發病して遂に再び立つことができなくなったのである。

上述の如く、戰後の教授の活動は目覺しく世界的指導者に適わしい多くの仕事を殘しており、この點では直接の弟子も一般の專門家も感謝を捧げねばならぬが、ケルン大學保險學講座並に保險研究所の後繼者を得ない中に、又博士が最後の仕事とした前述 Manes の Versicherungswesen, 3 Bde. の改訂事業を完成せずして逝かれたことは、教授自身にも心殘りであったろうし、直接の弟子の一人としても、まことに殘念に思うものである。

（一橋大學教授）

# ミュンヘン便り

## ――ミュンヘン大學の現狀――

増田四郎

ミュンヘンに來てもう十日たちました。町の樣子も大體わかりましたが、まだまだ表通りのことしか知りません。それでさしあたり今日はミュンヘン大學のあらましについてお便りすることにします。ミュンヘンの町全體がそうですが、ここの大學もひどい戰災をうけ、目下復興の最中です。大學の中庭や一部の教室は、まだこわれた煉瓦でうまっていますが、そのかたわら新しい部屋がどしどし造られています。廢墟のような講堂に立派な先學の像がたくさん並んでいるのをみるのは、痛ましい限りです。しかし復興した教室や研究室は、質素で明るく、モダーンな感じがします。

理工科關係には、いわゆるテー・ハー（テヒニッシェ・ホッホシューレ）が獨立して近所にあるので大學はつぎの七學部し